
また逢う日まで

総威

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

また逢う日まで

【Zコード】

Z7608S

【作者名】

総威

【あらすじ】

銀魂の登場人物、坂田銀時、桂小太郎、高杉晋助たちには堂名嘉
美來きみくという忘れられない女がいた。ある日、銀時のもとにやつてきた美來。それからまあいろいろあつたが平和に暮らしていた。そんなところに神威たちが江戸を消滅しにやってきた！美來たちはそれをどうやって止めるのか・・・

プロlogue

それは私が6才のとき・・・

「私のところに来ませんか?」

そう言われたときつれしかつた。

今までみんなに邪魔者扱いされていたから。

私なんて生きる意味なんてないと思つてたから

ホントにうれしかつた。

私を必要としてくれる人がまだいたんだつて思つた。

私は生きててもいいんだつてそう言われた気がした。

だから私は、私を必要としてくれた先生に言葉じゃ言い表せないくらい感謝している。

なのに・・・

なのにアイツらは先生を殺した。

だから私はアイツらを許さない。

この時私は決めたんだ。

先生を殺したアイツら

殺してやるって・・・。

その日は今にも雨が降りそうな曇り空だつた。

美來「やめて！先生に何するの！？」

氣絶している松陽を連れ行こうとするそいつに美來は飛びついた。

だが、子供が大人の力に勝てるわけもなく、

？「触るな」

そいつは静かにそつ言つと美來を蹴り飛ばした。

桂「美來！」

那琉琥「お姉ちゃん！？」

桂と弟の那琉琥は美來に駆け寄つた。

美來「ゴホッ！ゴホゴホ」

那琉琥「お姉ちゃん、大丈夫！？」

それを見た銀時と高杉は剣を持ちそいつに飛びかかつた。

銀時・高杉「つ！先生を離せエエエエエエー！！！！！」

美来「つはーー。」

またこの夢・・・

もう忘れたはずなのに・・・

私は今、次の仕事に向かっている。

私の仕事は“殺し屋”

自分でもなんでこんな仕事をしてるかわからない。

なんでも私の雇い主が「お前の強さはすばらしい」とかなんとか言ってたのを覚えてる。

まあでも自分でも強いとは思つてゐる。

でもこりんなことをするために強くなつたわけじゃない。

人を殺すために強くなりたかつたわけじゃない。

ただ守りたくて

先生や那琉琥、銀時や高杉、桂君やみんなを守りたかつただけ・・・

ただそれだけだった。

なのに守れなかつた。

先生やみんなを・・・

守れなかつた。

はー。

着いた・・・

あのクソジジーのせいで余計な体力を使つてしまつた。

それはさかのぼる」と40分前。

？「お嬢さん隣いいですか？」

美来「あ、は」「どうぞ」

？「どうも、ありがとうございます。あ、わしの名前は小杉とい
ます」

未来「あ、そうですか」

なんだよ」のじじー。誰もお前の名前なんて聞いてないよ。

小杉「それらは？」

なんで私がこんな赤の他人に名前教えなきゃなんないんだよ。

美来「あ、私はくみです」

もちろん偽名だ。

小杉「くみさんまだひひ行くんですか？」

美来「えつと歌舞伎町です」

小杉「そんなんですか。わしも若こりは歌舞伎町で遊んでたもんですよ。あー元気にしてるかな綾乃ちゃん。」

そんなこと知らないに決まつてんだる。なんだよこのクソジジイ。綾乃つて誰だよ。

小杉「あ、綾乃ちゃんはね団子屋で働いてたかわいい子でね、そりゃ毎日通つてましたよ。そのおかげで体重はどんどん増えていくもんホント参りましたよ。アハハ。しかもね～～」

まだしゃべるのかよこのクソジジイ。

アナウンス「次は～～駅～～駅お降りの方は足元にお気をつけろ
降りください」

小杉「あ、ここだ。じゃあ私はここで綾乃ちゃんに小杉がよろしく言つてしまつていつとこてください。ではまた今度」

何なんだ、あのクソジジイ。

しかも私が知つてゐるわけないだろ！・！・

結局綾乃つて誰だよ！

それに50年位前つて言つてたじゃん！

生きてるかどうかもわからんねーよ！

50年もたつてるんだから化け物みたいになつてるよーーー。

そんな化け物にござりやつて言えばいいんだよーーー。

しかもまた今度つてもいつか予定なんかねーよーーー。

てこうかもう会いたくもねーよーー。

それでのクソじじいは結局何が言いたかったんだーーー！

あーなんか考えれば考えるほどむかついてきた！

アナウンス「かぶき町駅、かぶき町駅お降りの方は足元にお気をつけてお降りください」

まああのクソじじいは忘れて仕事しよう！

なんか今回ぐつだぐだでした。

すいません。

次回

銀さんと会うかもです！

会わないかもしません。

お楽しみに！

第3話

真撰組屯所前

PM7:00

確かこの辺だつたはず・・・

真撰組 副長 土方

こいつを 殺せ

金は**公園のベンチの下にある。

真撰組の人ならここにいるだろ?・・・

でもこんな奴殺して捕まつたらどうじよウ?

プルルルルルー プルルルルルー

美來「はい。 美來です」

雇い主「あ、 美來? その真撰組の奴を殺すのあつたじゃんかーそれ
もうしなくていいよー」

美來「は? なんで」

雇い主「じゃあねー」

美來「あーちよつとー!」

プーブーブーブー

何なんだアイツは!

仕事もなくなつたしもつ帰るうつかな。

近藤「そこで何してるんだ」

ゴ、 ゴリラー?

じゃなくて・・・

美來「えつと、 あの仕事で・・・」

近藤「仕事?」

この服、真撰組の人だよね

美來「えっと、あの仕事……そう…仕事を探してまして……」

我ながら見苦しい言い訳……

信じるわけないよね……

近藤「そうか、じゃあ真撰組の女中をやればいい！おとど—昨日ちょうど1人やめてな。人数が足りなくて困つてたんだ」

・・・は？

近藤「じゃあ明日また真撰組に来ててくれ！待ってるぞ！私の名前は近藤だ」

美來「あ、あの、ちょっと待つてください！」

近藤「じゃあな」

近藤はそのまま走つて行つた。

あ、ありえない！

人の話を最後まで聞けよ！ていつかあの嘘を信じるなんてどんだけバカなのよ……

まあ明日ちゃんと断りう。

まあそれは良いとして、今夜の宿泊はいつよう・・・

さひやと仕事終わらして（殺して）帰る予定だつたから宿に泊まる
お金なんてないし・・・

しかたない野宿かな・・・

てこうかさつきからすひじく見られてるんだけど。

・・・と、怒つていうが、

美來は顔のバランスが整つていて世間でいふと美人といふ分類に入
る。

だから見られるのは仕方なかつた。

スタイルもいいから昔からモテていた。

だけど鈍感なのでそんなこと全然きずいていなかつた。

まあいつか、とつあえず公園にでも行こうかな。

第4話（前書き）

右手負傷中にて打ち間違いがあるかもしません！！

誤字脱字等ありましたら、

感想のところに書き込みください。

美來はお金がないため公園で野宿することになった。

ベンチの上に座り寝る準備をしようとした。

・・・が、むこうから人が来る気配がした。

美來「・・・誰？」

長谷川「よー、お嬢ちゃん何してんだい？」

げ、何このおつとこ。

酔つてる？

長谷川「お嬢ちゃん？キレイな髪だねー、ヒック。金髪でキレイだねー」

完全に酔つてる…

すつじい酒臭いし。

美來「あ、あのちょっと近寄らないでください。」

長谷川「いいだろー、あつ、お嬢ちゃん名前は？俺の名前は長谷川つて言うんだけど」

美來「もひ、ひぬやこ……しかも酒臭い……。」

長谷川「お、お嬢ちゃん?」

美來「もひ私の前から消えて。」

長谷川「あ・・・」

長谷川さんが美來の言葉にショック受けている。5-6
人の男の集団がこちらに向かってきた。その男たちは美來に話しか
けてきた。

男 a 「お、かわいい子発見!」

げ、またなんか増えた。」5-6
・

男 b 「そんなおひやんとおひんで俺りとええといひに行ひやな?」

第4話（後書き）

すいません

今回ちよつといつかだいぶ中途半端な終わり方です。v.v

次回は銀時田線です。

右手負傷中にて打ち間違いがあるかもあります。

そこは『理解ください』。

（銀時 said）

銀時「おい新八、ジャンプ買って来い」

新八「嫌ですよ。自分で買って来てください」

神楽「私の酢昆布も買ってくるアル」

・・・と言ひながら神楽は酢昆布を食べている。

新八「嫌です」

神楽「新八のくせに生意氣アルな」

銀時「ていうか今日なんでお前いるんだ？」

新八「そんなこといいからこれ買って来てください」

神楽「じゃあ私はもう寝るアル」

新八「じゃ、よろしくお願ひしますよ」

銀時「・・・っち。わかったよ、行けばいんだろ行けば」

帰り道

しつかしアイツ、最近俺の言ひ方と全然聞かなくなつたなー

新ハは絞めるとじて・・・

神楽は・・・

逆にやられるよな・・・

男「そんなおつむとおらんで俺うとええといひ行ひうやな?」

おーナンパかどれどれこの銀時様が見てやるうじやないか。

あー男のほうは残念な顔だな・・・まーナンパする男なんてそういう顔がいい奴なんていないよな。顔がよかつたら女のほうがよつてくるに決まつてるし。

女のほうわつと・・・

あ、女いた。

え・・・あの金髪つて・・・

美来!?

なんでアイツがここに・・・

銀時「・・・クソツ!」

銀時は美來のいる公園に走つて行つた。

男 a 「おい、おっさん。ちつとも消えろ」

長谷川 「す、すいません。じゃあねお嬢ちゃん」

美来 「あ・・・」

あのおっさん逃げやがった。最低だよ、あのおっさん。

男 a 「邪魔者も居なくなつたことだしええど」行こうや。な?」

美来 「・・・」

もひひひるやこな。

銀時 「女相手に何してんだよ」

男 b 「ああん! ? なんやお前」

そこに1人の男が走つてきた。

この人見たことある。誰だっけ・・・。あ、あの銀髪、もしかして

美来 「・・・銀時?」

銀時 「よお、久しぶりだな。ていうか今俺のこと忘れてただろ」

美來「あ、ばれた。えへへ。それにしても久しぶりだね。元気だつた？」

銀時「えへへ、じゃねーよ。お前は相変わらずだな」

男b「おい、なんだよお前。いきなり出てきて、人をムシすんなよ」

と、言いながらその男bは涙目になつていた。

え、なんで涙目? 気持ちわるいと美來と銀時は思つていた。

男b「もういいよ、帰るよ。お前たちは感動の再会でもなんでもすればいいだろ……じつせ俺らなんて……」

男a「もうこいよ、俺ら帰るからあとじゅうくつどい。おい、お前ら帰るぞ。」

手下たち「はい! 覚えてろよ……」

と、みんなお決まりのセリフを言いながら走つて行つた。

美來「え? 何、今の? あの人たちなんだつたの?」

銀時「さあ、まあいいんじゃねーの?」

つとぼけーとしている。

美來「……」

銀時「美來つ……」うした、アイツらなんかされたのか……」

美來「お腹が・・・」

銀時「お腹が？」

美來「…減った」

バタン。

美来はそこで意識がなくなつた。

銀時「……もう仕方ねえなア、よいしょつと」

銀時は美來をお姫様抱つこし万事屋えと帰つて行つた。

キヤ
！！

私もお姫様抱っこされたい！！なーんて（笑）

まあここはスルーしてください。

万事屋到着。

銀時「おーい、帰つたぞー！」

すると中から新ハと神楽が走ってきた。

バタバタバタ

神樂一銀ちゃん、酢昆布買つてきたアルかー？

新ハ
銀さん通いじゃ
ないですか！心配しましたよ！」

銀時 おう 悪か たな

新ハ
一
鉢さん
その子どうしたんですか？もしかして…

言しながら新バは鉛時を軽蔑のまなざして見ていた

モモシロノ神樂モ

金時
あ
こ
い
は
な
」

説明しようとしているが、神楽がいきなり銀時に向かって走り出した。

と、言いながら銀時の顔に蹴りを食らわす。

同時に銀時の腕にいた美來が落ちそうになつたのを受け止めようとしたが、受け止めきれずに美來は頭を打つてしまつた。

ゴンツ！！

美来一痛つた！！何！？何が起つたの！？

神楽と新ハガ美來に駆け寄り

神楽「大丈夫アルか！？」ごめん、私のせいアル！ホントに大丈夫ア
ルか！？？」

美来 あ、えつと大丈夫だけど、あなたたち誰？ ていうか私なんてここにいるの？ ていうか、お腹減った・・・」

新八
銀さん

神樂一銀ちゃんに誘拐されたアルよ！！覚えてないアルか！？」

美来「銀さん？銀ちゃん？・・・え！？私、誘拐されたの！？もし
かしてあの男たちに！？でもアイツら泣きながら逃げてつた気がす
る・・・」

神楽「逃げてつた？男たち？何言つてるアルか！？」

新八「か、神楽ちゃん落ち着いて！…とりあえず銀さん中に入れて

「話しまじょひつみ」

神楽「そ、そ、そ、うアルな。銀ちゃん、早く起きるアル！」

そつ言いながら銀時にビンタを食らわす。

す、す、じ、この女の子だな・・・って、あれ銀時？でも銀時ってあんなに老けてたつけ？？

銀時「痛えよ！…もっちょっと優しく起せいせー！」

新ハ「とりあえず中に入りましょ。近所迷惑です」

銀時「お、おひ」

まあ、いいや。私はもう帰らつと。

銀時達に黙つて帰ろ「歩踏み出せ」としたとき新ハに声をかけられた。

新ハ「あのアナタもどうぞ」

神楽「そ、うアル。アンタがいないと始まらないアル！」

そつ言いながら神楽は美來の手を引っ張り中に連れる。

そして新ハは銀時の手を引っ張り部屋の中に連れ込んだ。

神楽「……で、どうこう」とアルか？ちゃんと説明するアル」

えーと、なんでこんなことになつてるんだ？

はい、よーく考えよ。」

お金は大事だよ……。

つて、そんなこと言つてゐる場合じやなかつた。

それにしてもこの人ホントに銀時なんだらつか？

さつきは暗くて、半泣きの男が気持ち悪すぎてこの人の顔ちゃんと見てなかつたもんな。

銀髪だから銀時なんだらうけど……銀時つてこんなに老けてたつけ？もうちょっとカツ口にかつたような……

でも、さつきから『銀ちゃん』つて言つてたからさうなんだらうけど……

でも昔のまつがカツ口いかつたよつた氣が……

銀時「あのー、美来さん？」

美来「は、はい！何でしょ？」

銀時「さつきから心の声、ダダ漏れですよ。銀さんそんなに言つまど
老けてませんからねーーー。」

美來「……ほ、ほんと?」

銀時は黙つてうなずいた。

新ハ「と、とりあえず自己紹介しましょうか。僕は志村新ハです。」

なんかパツとしない顔だなー。

自己紹介されても覚えられる自信ないよ・・・。

そんなことを美來が思つていると新ハが突然立ち上がつた。

新ハ「どうせ僕はパツとしない顔ですよ!仕方ないじゃないですか。僕だつて好き好んでこんな顔になつたわけじゃないんですからーーー。」

と、言いながら新ハはトイレに駆け込んだ。

美來「あれ? もしかしてまた声に出てた?」

銀時に聞くと、

銀時「ああ、最初つから最後まで全部口に出てた

美來「う、うそーーー。悪気があつたわけじゃないなかつたのーーー。あ、謝らなくちゃーーー。」

と、立ち上がりとしたとき銀時に腕をつかまれた。

銀時「そつとしといてやれ」

美來「う、うん」

神楽「そうアル、あんな駄メガネのことなんかほつといてもいいアル。次は私の番アル！」

だ、駄メガネって私よりひどいことを・・・

神楽「私は神楽アル！銀ちゃんの」主人様アル！そしてかぶき町の女王様でもあるアルよ！」

美來「銀時の」主人様なの！銀時がお世話になつてます」

銀時「いや、違うから！美來も信じなくていいから！」

新八「そうですよ、嘘はいけませんよ神楽ちゃん」

美來・神楽・銀時「あ、戻ってきた」

新八「・・・いいから血口紹介の続きしましょ」

美來「あ、次私か。私は堂名嘉美來つて言います。銀時とは・・・幼なじみみたいなもんかな」

新八「幼なじみなんですか？」

神楽「昔の銀ちゃんどんなどつたアルか？」

美來「そ、それは・・・」

銀時「もうその辺にしどけ。もう遅いから寝るぞ」

神楽「えー、銀ちゃんの恥ずかしい話とか聞きたかったアル

そういうながら拗ねている神楽。

美來「あのー」

新八「どうかしましたか?」

美來「お腹減ったので、何かくれませんか?」

新八「あ、いいですよー。」

そしてみんな仲良ぐ♪飯を食べましたとさ。

晩御飯を食べ終わった。

晩御飯を食べ終わった後新ハは自分の家へと帰つて行つた。

そして神楽は押し入れに入り「美來、明日銀ちゃんの昔話聞かせるヨロシ!」と、言つて押し入れに入ってしまった。

私は銀時に「ちょっと散歩でもするか?」って言われたから「えー ムリ」って断つていたのだけど無理矢理外に連れ出された。

銀時「久しぶりだな、お前とこいつやつて話しするの」

美來「そうだねー、もう眠いなー、早く帰りたいなー」

銀時「つたく、お前なあ・・・相変わらずだなお前は。まあ前のほうがかわいがつたけどな」

美來「悪かつたですねー、不細工になつてて。可愛くなりたいからお肌のために早く寝たいな」

銀時「・・・今何してんだ?」

美來「今?今は銀時にムカついてる」

銀時「・・・そう言つ」とじやなくて、今、仕事何してんだ?」

美来「テキトーに……」

そつ言いながら美来は俯いた。

銀時「美来。嘘つくな」

美来「つー」

美来は昔から嘘をつくとき俯く癖があつた。

銀時「相変わらずその癖は直つてねえんだな。いいからちゃんと言え。心配なんだよ。お前だけ今までどこにいるかわからなかつたんだから。心配ぐらうするだろ」

美来「そつか……。今は……殺し屋……やつて……る」

銀時「なんでー?」

美来「仕方ないじゃん! 那琉琥だつてどつか行つちやうし……。ほかにどうしたらいいかわからなくて……誰にも頼りたくないで、自分でどうにかしなきやつて。殺し屋はすぐにお金が入るからバイトするよりいいかなつて……だから」

説明してゐるといきなり銀時が抱きしめてきた。

銀時「つらかったんだろ? 泣けばいいよ」

美来「つー! 別につらくないし! 泣かないし!」

銀時「いいから」

美来は、子供みたいに泣き続けた。

銀時「落ち着いたか？」

美来「う、うん」

銀時「それと、もう殺し屋なんてやめる」と一・わかつた？」

美来「う、うん。でも仕事ビツシ、あつ！」

銀時「ビツシた？」

美来「確かに、変なゴリラっぽい人に真撰組の女中になればって言われたの思い出して」

銀時「それにしたら？」

美来「じゃあ明日行つてみようかな」

「うして明日、真撰組に行くことになつたのだった。

次の日

美來は銀時に連れられて真撰組の屯所に来ていた。

銀時「美來、一人で行けるか？」

美來「行けるよ、それにいつまで子供扱いしてんの？殺すよ？」

そう言いながらこっこり微笑んだ。

銀時「美來さん？殺すよってひどいんじゃない？あーあ昨日の美來は可愛かつたのになー銀さんの腕の中であんなに泣いちゃつて……うつ！」

話しててる途中に銀時の腰に美來の蹴りが入った。

腰をおさえながら銀時はその場に崩れ落ちた。

美來「銀時黙らないと……殺すよ？」

また美來は微笑んだ。

銀時「す…すいません」

美來「じゃ、電話するからお迎えようじへ」

そう言いながら美來は真撰組の屯所に入つて行つた。

その背中を銀時は見えなくなるまで見つめていた。

こんなに簡単に入れたけど大丈夫なのかな？

確かゴリラさんに…

「ゴリラさん？ そんな名前の人いたつけ？ でもゴリラって言ひてた気が…」「こり…違う…」「こり…

あつ！ 確か近野？ つて感じだつた気が…

あ！ そりいえば… 銀時が

銀時「とりあえず近藤つて奴か、沖田つて奴か、大串君に話し聞いたら大丈夫だ」

美來「わかつた、近藤、沖田、大串ね」

そうだ近藤だ！

えーと…あ！ あの地味なくせにバトミントンのラケット振つてる人に聞いてみよ！

美來「すいません！」

山崎「はい！」

山崎はミントンのラケットを振るのをやめた。

美來「近藤さんど」にいるか知りませんか？」

山崎「局長ですか？局長なら、部屋にいると思いますけど…あ…部屋はそこまがつてカクカクシカジカ」

美來「わかりました。ありがとうございます」

と、微笑んで近藤のもとへと向かつたのだ。

山崎は美來の後ろ姿に見惚れていた。

山崎「た、大変だーーー！」

えつとこにか…。

はあ、あの近藤って人私のこと覚えてなかつたらどうじょつ…。

襖を開けようとすると、

……ん？話声がする。

土方「だつから！最近あの攘夷戦争で名を遺した金色の鬼神がこのかぶき町で暴れまわつてゐるって話が来てるんだよ…」

近藤「金色の鬼神？」

沖田「それ誰ですかイ？そんな名前聞いたことないですゼイ」

ガタツ！

土方「誰だ！」

や、やば！美來は必死に逃げた。その速さは普通の女性では考えられない速さだつた。

沖田「誰も居ませんぜ？」

近藤「風じやないのか？」

土方「人影が見えた気がしたんだが…」

近藤「それで誰なんだその金色の鬼神ってのは」

土方「俺も詳しく述べ聞いたことないんだが」

その金色の鬼神おにってのはあの白夜叉と一緒に戦つてたとか。

見た目は名前とおり金髪なんだつて。

それにそいつが通つた後は誰一人生きてる奴がいないんだ。

沖田「ふーん、…で、そんな奴がなんでもまた」

土方「さあ? 詳しいことはまだよくわからない。上からはそいつを捕まえるつて、白夜叉と一緒にいる可能性があるから、だそうだ」

美來 side

なんでそんな噂が…。私じゃない…。もう、昔のことは忘れないのに…。

びつじょつ。このままじゃ銀時達にまで迷惑をかけちゃう…。

美來は無我夢中で走つた。

第1-2話（前編）

今回美来の過去?のお話です!.

私は昔、戦場を駆けまわっていた。田の前にいる敵を無我夢中で殺していた。

ここいらの命なんて先生の命に比べたらどうでもいいし、比べるまでもないと思っていた。

生きてる意味なんかない。生きる価値なんてない。死ねばいい。

・・・でも、こんなことをして何か意味があるんだろうか？

いつも思つ。

死んでるここいらを見てこんな私なんかが殺していいのだろうか。

本当に生きる価値がないのは私なんぢゃないんだろうか？

何の意味なく生きてるのは私なんぢゃないだろうか。

私のせいで死んでしまった人。私のせいで怪我をした人。何の権利もないのに人の命を奪ってしまった。

実際なんでこんな戦争をしてるのかわからなかつた。

死人や怪我人が出てるだけ、本当に意味があつたのだろうか。

人の命まで犠牲にしていたのにもかかわらず、

こんなことをして何か得るものがあつたのだろうか？

何も得なかつた。

何も得ないまま終わつてしまつた。

失ったものの方が多いすぎた。

犠牲も多いかつた。

それなのにこんなことをして……

・・・・意味が・・・・・・・・・・・・あつたのかな?

氣づくと海辺まで来ていた。

そんなことを考えてくるとつまにか辺りは真っ暗になっていた。

私はどうしたらいこのだらう?

生きてて何か意味があるのでないつか？

「のまま今まであったことを胸の奥にしまって、生きてこいつか。

『そんなことわせない。あなたはこの苦しみから一生逃れられないのよ』

頭のどこかでそんな声が聞こえた気がした。そしてあの戦争で殺された人たちの顔が思い浮かんだ。

ああ、私がしたことは許されないことなんだ。

それにこの苦しみを死ぬまで背をこづけなければならなくなるだ。

それほどのことをしてたんだな・・・と思つた。

ならばもうこのまま死んでしまおうか、そう思った。

そして美來は、その場にブーツを脱ぎ、キレイに揃えて置き、いつも隠し持っていた小刀をブーツの隣に置いた。

そして静かに海に入つて行つた。

美來が歩くたびにバシャ、バシャといつ音がする。

体全体が海に入つたとき遠くで声が聞こえた気がした。

もつ私をほつといひ。

私にかまわないので。

もう私を・・・樂にして。

お願いだから。

昨日ジャンパーを置わせていただきました！

銀魂を見ると…なんと辰馬が！！

めっちゃうれしくて飛び跳ねちゃいました！！

今、鏡音レン君の歌聴きながら打つてます！
わづかばこです！！

意識がなくなつたとき、松陽先生や銀時たちと迺^ハした楽しかつた時のこと思い出した。

あのころは喧嘩とかしてたけどみんな仲良くて楽しかつたな・・・

あのころに戻りたい・・・

美來「・・・」

「じいじ？」

気が付くと田の前に真っ白な天井があつた。

私、あの時死のうとしたはずなのに・・・死ねなかつたの？

？「気が付いたか？」

え？

声がしたほうを向くと

そこには黒髪で真撰組とかいうこの制服を着て偉そうに煙草を吸つてる男がいた。

美來「なんで私……こんなとこに、それにあなたは？」

土方「俺は土方。ここは病院、お前は海におぼれそうになつてたところを俺と俺の部下が助けたんだ、大丈夫か？」

美來「なんで……」

土方「……は？」

美來は土方に向かつて思いつきり叫んだ。

美來「なんで助けたんですか！？そんなこと誰も頼んでなんかないので……」

土方「……何があつたか知らないが、落ち着け。」

美來「あなたに……あなたに何がわかるんですか？私の苦しみなんか知らないくせに……もう、これ以上苦しみたくないの……『逃げるだけ』……そう思われても仕方ないかもしれないけど！！もう嫌なの、もうつらいの、苦しいの！もう死にたい、楽になりたいの」

美來は泣きながら訴えた。それを土方は黙つて聞いていた。

土方「……お前に何があつたかしらねーが、過去のことなんか忘れたらいいだろ？」

美來「忘れられないの、気づいたらそのことばかり考えて……もうどうしたらしいかわからない」

土方「いきなり全部忘れるなんてできないならひとつひとつ忘れて
いけばいいだろ」

その人はそういう優しく微笑んだ。その言葉に私はとても助けられた。

その顔は私にはとても眩しかつた。この人はなんて優しい人なんだ
らうか・・・。そう思つた。

あの後、美來は退院した。

そのあと土方に万事屋の近くのフジミレス前。

美來「あ、ここでいいです」

土方「あ、ああ。ホントにここでいいのか？ 家まで連れて行ってやるつか？」

美來「え、いいんです」

土方「そうか」

万事屋まで送つてもらわなかつたのは、美來も少し考へたかっただら。

銀時に真撰組に連れて行つてもらつた日から3日たつてゐるのだ。
つまり、美來は1日間意識不明の状態が続いて様子見のため1日入院していたのだ。

3日も連絡せずにいたのだから銀時と神楽ちゃんとメガネ君は怒つているだろつ。

そのことの言い訳を考えたかつたのだ。

さすがに、『自殺しようとして、そのあと助けられたけど意識が戻らなかつたため病院で入院してました。』とは言えないからだ。

土方「じゃあな、もう自殺なんて馬鹿な」とするなよ

美来「ありがとございました」

そう言つて、土方はパトカーに乗つて帰つて行つた。

なんかよくわかんない人だつたな。

そう思い美来は万事屋へ足を進めたのだ。

万事屋玄関前

美来「ふう・・・

もし聞かれても言い訳はちゃんと考えたし大丈夫。

ガラガラガラ

美来「た、ただいまー・・・

返事が返つてこない。誰もいないみたいだし、仕事にでも言つてるのかな?

そう考へてゐるときなり背中に言葉にならないくらいの激痛が走

つた。

美来「つづー」

美来は一瞬何が起きたのかわからなかつた。

よく見たら神楽が泣きながら自分に抱き着いていた。

美来「か、神楽ちゃん！？ビックリしたの？」

神楽「『どうしたの？』じゃないアルよ！…今までどこ行つてたネ！？心配したアルよ！」

美来「！」、「めん」

美来は言い訳を考えてるとき『どうせ』こと言つても『どうせ』「ふーん」、で終わるんだろうな。今までだつてそうだつたし、私のことを心配してくれる人なんていない』そんな風に考えていた。

それなのに、神楽が泣いてるのを見たとき死ぬほどびれしかつた。

私のことを心配してくれる人がいるんだった。

美来「神楽ちゃん」

神楽「何アルか！…ちょっと謝つたぐらいじゃ許さないアルよ！」

美来「ありがと」

神楽「な、何アルか！…え、ど、ビックリしてないてるアルか…美来？」

美来「何でもないよ、ありがとうね」

人に感謝したのってどれくらいぶりだろう。

神楽「……で、なんで帰つてこなかつたアルか？」

美來の正面に神楽は座つてゐる。

「ちらりをジーつと見つめている。

美來「えつ……と」

神楽「……」

美來「……」

神楽「……わかつたアル。話したくなら話さなくていいアル」

美來「神楽ちゃん……」

神楽「話したくない」とだつてアルネ！だから聞かないアル！」

美來「……ありがと」

神楽「じゃあこれから買い物に行くアル！今日は私の当番ネ！」

そう言い神楽は立ち上がつた。

神楽「早くしないとおいでくアルよ！」

そう言い玄関に走つて行つた。

美來「あ、待つてー・神楽ちゃん」

大江戸マート近辺

神楽「今日の『』飯は何にするアルか?」

美來「うーん、そうだな。何がいい?」

そう言いながら、神楽を見た。

すると、神楽はにっこりと笑つて、「たま『』かけ『』はん」と答えた。

神楽にそういわれて美來は困つた顔をした。

美來「・・・神楽ちゃん、たま『』かけ『』はんつてどんなのだっけ?」

笑いながら、「じ忘れしちやつた、アハハハハ」っと言つてゐる。

それを聞いた神楽はたま『』かけ『』はんのことを知らない人間がいた

なんて信じられない、と顔で美來に答えた。

神樂「た、たまごかけ」はんは白いご飯に卵を、

美來「思い出した！－白いご飯にたまごかけてその上にマヨネーズ
ぶっかけるやつでしょ！－あれば美味しいよね！－じゃあこれからご
飯を買いにい－－！」

そつ言つと美來は笑顔で歩いていく。

置いていかれた神樂は必死に思い出そうとしていた。

たまごかけはんに「マヨネーズ」というものをかけるのか。

美來「神樂ちゃん！－おいでくよ－！」

神樂「あ、待つアル！」

まあ、いつか。そう思い美來の後をついていった。

美来「えーと、とつあえず卵何パックくらい買つといたらいいかな
?」

神楽「いつぱに買つね…明日の朝と昼と夜とその次の日の朝と…
・まあたくさん買つコロシ!」

美来「わかつた。たくさんだね」

やつ西うと美来は、卵のパックを軽く20個くらい入れた。

美来「足りるかな?これじゃ少ないよね?」

と、隣にいるはずの神楽に聞いたが返事がない。

おかしいな、と思つたら神楽はお菓子「一ノナ」のといひこいた。

はぐれてしまつてはダメだと思つた美来は、卵のパックをさりげ
0個追加して神楽のもとに向かつた。

美来「何してるので?神楽ちゃん」

神楽「うわー!美来びっくりするアルな。今、酢昆布買うか迷つて
るネ」

そう言いまた酢昆布のほつに視線を戻す神楽。

美來「うーん、じゃあ今日は私が買つてあげる

神楽「ほんとアルか！でも、悪いアルよ」

そう言い俯いた神楽。

美來「いいよ、心配かけちゃったから」

神楽「じゃあ、銀ちゃんたけにも買つて行くね」

美來「うーん、じゃあ何にする？？？あつー

そのまま美來は新商品コーナーに向かった。

そして新商品のメガネ型チョコを手に取つた。

(これ、メガネ君にあげよっと)

そのままカゴにいれた。

神楽「美來！決まつたアルよ！」

そう言いながら走つてきた神楽の手の中にはたくさんのお菓子があつた。

その手には3分の2が酢昆布だった。

美来「・・・酢昆布多いよね、そんなに酢昆布好きなの？」

神楽「大好きネ！！」

美来「そつか、じゃああとはマヨネーズだね」

神楽「じゃあ、早く行くアル！！」

その頃万事屋では

銀時は寝ころびながら、ジャンプを読んでいた。

その銀時に向かって新八は話しかけた。

新八「銀さん」

銀時「んー？」

新ハ「せつせんお登勢さんから聞いたんですけど、美来ちゃん帰つて
きたそうですね」

銀時「ふーん」

返事しながらまだジャンプを見てこる。

新ハ「よかつたですね」

銀時「別に、このまま帰つてこなくていいナビ。で、ビリーハン
だ。」

その返事を聞いて新ハは笑いながら答えた。

新ハ「今、神楽ちゃんと晩ごはんの買い物に行つてゐたんですけど
「みー」

そんなのんきなことを言つてる新ハだったが、この後あんなことが
起じるとは予想もしていなかつた。

美来・神楽「ただいまー」

新八「お帰りなさい」

美来「ごめんね、メガネ君。心配かけて、そのお詫びにお菓子買つてきたの。はい、これ」

と言つてメガネ型チョコを渡す。

そのあと美来はトイレに向かつた。

新八「メ、メガネ・・・」

その後ろ姿を見ながらボソつとつぶやいた台詞に美来はきづいてなかつた。

神楽「銀ちゃんにもあるアルよー！イチ」「牛乳とかいっぱい買つて
きたネ」

銀時「おー。新八、冷蔵庫いれとけー」

新八「はいはい、わかりましたよ」

そう言つて冷蔵庫に向かう。

冷蔵庫の前で思い出したように新八が神楽に聞く。

新八「あ、今日神楽ちゃんが晩ごはんの当番だよね。何にするの？」

神楽「たまごかけ」はんアルよー！あ、銀ちゃん、新八台所入って
きちゃダメアルよ」

銀時「へいへい」

新八「わかつた」

台所

美来「ごめん、神楽ちゃん待つた？」

神楽「遅いアルよ！そーいえばマヨネーズはかけたい人だけ書けたらいいと思つネ！」

美来「そうだね。好き嫌いもあると思つし。よし、じゃあ早く用意しちゃおう！」

神楽「銀ちゃん、新八できたアルよ！」

銀時「できたって！」飯に卵のつけるだけじゃねーかよ

新ハ「まあまあ、じゃあ食べましょうか」

銀・神・美・新「いただきまーす」

みんなでいただきますを言つた後美來がマヨネーズを取り出しかけ始めた。

その様子は珍しかで見たことがあった。

神樂は気にせず食べているが銀時と新ハは固まっていた。

2人は田で会話している。

新ハ（銀さん…！もしかして…）

銀時（知らねー、昔の美來はこんなことしてなかつたぞ…！…）

ずっと美來を見ている。

美來「ビーしたの？あ、もしかしてマヨネーズいる？気づかなくて

「めんね。今かけてあげるから」

そう言い銀時と新八のお茶碗を取つた。

銀時「ちょ、待つて……」

新八「あ……」

美來「さあ、召し上がり」

笑顔でたまごかけごはん美來バージョンを渡してきた。

いつして楽しい楽しい夕食の時間が過ぎて行つた。

その頃

春雨第七師団では・・・

? 「初めまして、神威殿、阿伏鬼殿。私は、花柳様に仕えさせてもらつて、いる夏と申します。隣にいるのが空です。」

神威「初めまして」

そう言いながらここに笑つて、いる神威。

神威の前に現れた女と男。夏と空。女のほうは左耳は髪の毛で隠れており、あの髪は横に一つにまとめてある。男のほうは前髪が長くて、顔があまり見えていない。

神威「で、何しに来たのー?」

夏「今回神威様のところに来たのは、花柳様から伝言を伝えに来てま

した」

そう言い空がある紙を阿伏兎に渡した。

阿伏兎「これは？」

夏「それは江戸を消滅させる武器の設計図です。もう完成しております。名前は『月雅^{げつか}』。詳しいことは後程お知らせします。では」

そう言い残し出て行つた。

神威「どうするー？ 阿伏兎？ これやんなくちゃいけないの？」

阿伏兎「すうとうひにこ、やらねーと命がなくなるぞ」

神威「でも、面白がうだよね。地球つていつたら銀髪のお兄さんもいるしね」

阿伏兎「はー、もう勝手にやれ」

第16話（後書き）

阿伏兎のしゃべり方が難しい><

阿伏兎「・・・花柳つて言つたら第六師団団長じやあねえか」

神威「何? 阿伏兎知り合い?」

阿伏兎「知り合いつてほどじやあねえけど最近、第六師団団長になつた奴だ」

そう言いながら神威を見たが、神威は二コニコしながら外を見ていた。

そんな神威を見ているときなり振り返り

神威「それでその紙には何て書いてあるの?」

と、聞いてきた。

そう言われた阿伏兎は慌ててさつさとあわただ花柳の部下が渡した紙を見た。

阿伏兎「中は、あの月雅つて言つ武器の設計図と・・・これは・・・

」

神威「なにな?」

神威が阿伏兎に近づく。

そして、手元を覗き込んだ。

神威「・・・ふーん、これはおもしろそうだね

あるといひで・・・

- - - - 1週間前 - - -

- - - - その頃の花柳と夏 - - -

夏「あの「一人」の話して、のつてへるでしょつか?」

花柳「のつてへるを」

夏「そうですね、のつてきてもうわないと、あの方のためにも・・・

「

？？「花柳、1週間前から地球で金色の鬼神が暴れまわるようだな」

花柳「はい、まだ詳しいことはわかつておりますがそういう噂を最近耳にしますね。上の方たちは今、必死に探しているそうですが私たちはどうしましょうか」

？？「・・・金色の鬼神・・・か・・・」

そつ言い外を眺めている人物に向かつて花柳は聞く。

花柳「どういたしましょつか？」

？？「・・・使えるかもしねないな。花柳、行つて来い。」

花柳「はい」

そつ言い花柳は、部屋を出た。

？？「・・・・・生きていたのか、金色の鬼神・・・・・ふ、
ふ、ははははは」

部屋の中には、笑い声が響いた。

第17話（後書き）

パソコンのキー ボード壊れてるんで更新遅くなりました。

パンコちゃんがおひさしぶりでした！

『江戸消滅計画を承諾してくださるなら第6師団団長室に来てください。詳しいことはそちらでお話します。』

神威たちは、この計画に参加するため第6師団団長に話を聞きに行く途中なのだ。

神威「楽しみだね、地球には、強いお侍さんがいるってここに書いてあるけど、これ全部殺しちゃっていいのかな?」

いつもの笑顔で阿伏兎に聞いた。

阿伏兎「いいだろ、ここにもちゃんと書いてあるし。『この計画に参加していただけるなら地球人をどれだけ殺しても構いません』って。けど、団長」

神威「何? 阿伏兎?」

阿伏兎「これから、第6師団団長に会いに行くんだくれぐれも粗相のないようにしてくれよ」

神威「はいはい、わかつたよ」

第6師団団長室前

「ノンノン

神威「第7師団団長、神威です」

夏「お入りください」

ガチャ

バタン

夏「花柳様、神威様と阿伏鬼様が来られました」

花柳「ここに来たといつては」の計画に参加していくださると思つていいのですか?」

そつ言い花柳はこちらを向いた。

花柳と呼ばれた男は髪が長く、その黒髪は腰くらいまであった。そして、目をつぶつてこちらを向いていた。

神威「いいよ。けど、強い奴は俺が殺しちゃつてもいいよね

花柳「まあ、お茶でも飲みながら向こうで話しましょ。夏、お茶を

夏「はい、わかりました。あ、花柳様これを」

そういう夏は花柳に杖を渡した。

それを見た阿伏兎は

阿伏兎「どこか悪いんですか？」

花柳「少し目が・・・まあそのことも含めて話しましょう。空、^{くう}神威さんたちを案内してあげてください」

花柳がそういうと部屋の隅から空が出てきた。

神威「うわ、いたんだ」

阿伏兎「団長！失礼なことを言つたな！すいません」

花柳「いいんです」

そして空は無言で神威と阿伏兎の手を引き隣の部屋に連れて行った。

急に引っ張られたので神威と阿伏兎は

神威「おつと」

阿伏兎「うわっ」

その後を花柳、夏と続く。

花柳「すいません。空は無口なもんで全然しゃべらないんです。」

阿伏兎「そうなんですか。」

そういう空を見る神威と阿伏兎。相変わらず部屋の隅に立っている。

花柳「では、話しましょつか。と、言つても前に夏と空が渡した紙にほとんど書いてあるんですけど、何か質問がありますか？」

神威「わつとも言つたけど強い奴は俺が殺しちゃつてもいい？」

花柳「いいですけど、1つだけ条件があります。その条件はこいつにある人物を渡してほしいんです」

阿伏兎「渡してほしい人？」

花柳「はい、その人は『金色の鬼神』と呼ばれています」

神威「金色の鬼神・・・」

夏「金色の鬼神は攘夷戦争の時にあの白夜叉と一緒に戦つていたと聞いています」

神威「白夜叉・・・」

阿伏兎「その情報は確かなんですかい？」

そつ言い夏を見た。

夏「はい。確かに思います」

花柳「その条件を飲んでいらだけたら後はあなたの方の好きにしていいだけで構いません。私たちは今日から1週間後にここを出発しますのでそれまでにあなた方も地球に行ってください」

神威「阿伏兎、金色の鬼神だつて。どれくらい強いんだろうね」

そういう先に進む神威。

阿伏兎「団長、面倒事はやめてくれよ」

そういう追いかける阿伏兎。

神威たちが1週間後の出発の日まで準備している中、美來たちは・
・
(準備しているのはほとんど阿伏鬼です)

美來「暇だね・・・。」

神楽「暇アルな・・・。」

銀時「・・・。」

今日は、依頼が何もなくすることがなくて暇なのだ。
新ハはといつと、お通ちゃんのライブに出かけているため休みなのだ。

美來「ひまあ」

神楽「暇アル」

銀時「ああもつ、つるせえなあ。そんなに暇なりびつかで遊んで来る
い」

美來「えー、びつしょつかな。神楽ちゃんびつするへ。」

神楽「行つてもいいけど、酢昆布代だすアル」

銀時「何で、お前のために金出さなきゃいけねーんだよ。さつさと
行つて来い」

神楽「いいから、早くだせヨ」

銀時「・・・はあ、しかたねーな。ほらよ」

神楽「わーい、銀ちゃんありがとネ。ほら、美來行くアルよー。」

美來「あ、神楽ちゃん待つて。じゃあ、行つてくるね」

銀時「おつ」

そういう、美來と神楽を見送った銀時だった。

神楽「あー」

この日は暑かつたので銀時にもうつたお金で酢昆布とジュース買つて飲んでいた。

美來「それにしても暑いね

神楽「そつアルな」

そんな会話をしていると後ろから

沖田「あり、チャイナこんなとこりで何してるんでイ」

とこり声が聞こえた。

神楽「あ、サド。こんなとこりで何してるあるか？またサボリアル
か」

美來「神楽ちゃん、この人、誰？」

神楽「ああ、こりつはサドアル。名前どおりドゥナやつアル」

美來「ふーん、サド……。変な名前ですね」

そつ言つて笑いかける美來。

沖田「おい、チャイナ。俺の名前はサドじゃないですゼイ。沖田總
悟つていう名前があるんでイ。あ、すいません。チャイナにはわから
なかつたですかイ」

神楽「それくらいわかるアルよ！」

そつ言つて返す神楽を無視して沖田は美來に名前を聞いた。

美來「あ、すいません申し遅れました。美來と言います。よろしく

お願いします」

沖田「よろしくお願ひします。ちよつと質問いいですかイ」

美來「なんですか」

沖田「アンタはうですかイ？それともMですかイ？」

美來「えつと私はどっちかといつとMだと思います」

沖田「ふーん、やうなんですかイ」

美來は答えて思つたがこの会話といつかこの質問自体ちよつとおかしくないかと、思つた。

そんな会話をしていると、

女「ちよ、ちよとやめてくれさい」

向ひうで天人が女人の人に絡んでいた。

女「離してください」

天人「うるせーな、お前ら人間はこの、カイザーフュニックス様の
いつもとやえ聞いていればいいんだよ」

天人が女にしつこくからんでいたので沖田と神楽が助けに行こうとしたその時美來がその天人に話しかけていた。

美来「ちょっと、 その天人さん。 その人話してあげなよ。 嫌がつ
てるじゃん」

天人「あん？ お、 なんだこの女もいい女じやないか。 お前もついて
こい」

そういう美来の手をつかむ。

それを見て沖田と神楽が駆け寄った。

美來一離也

そつ言つた美來の声は今迄に聞いたことのないくらい冷たい声だつた。

天人はいうことを聞かない未来に腹が立つたのか美来を殴つた。それを見た神楽が美来！と呼んだが美来からは何の反応もなかつた。

すると美來は刀を持つて天人の腕を切り捨てた。腕を切られた天人は痛みと自分の腕がとんだことにびっくりして叫んでいた。

女「キヤ、キヤ——！」

そう叫ぶ女性に美來は「もう大丈夫よ」そういう優しく微笑んだ。

そう言われた女性は礼を言つてその場を立ち去つた。

天人は「覚えてろよ！」と、いつとその場を立ち去つた。

そして美來はその持つていた刀を沖田の腰に差すと神楽に微笑み

美來「帰ろうか」

そういう歩き出した。

神楽「う、うん」

そういう後をついて行つた神楽。

その美來の後姿を沖田はずつと見ていた。

第19話（後書き）

これ書きながらスponジボブの歌を歌つていた作者です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7608s/>

また違う日まで

2011年10月8日18時06分発行